

あした輝くテクノロジストへ

## ものづくりと人づくり

野村東太 著

本書は、ものづくり教育を、科学技術の発展や労働力の視点からだけでなく、人づくりの観点にまで言及し、若者の考え方、生き方を、歴史・倫理観に及んで述べている。著者は、平成13年、横浜国立大学の学長から埼玉県行田市にある「ものづくり大学」の初代学長として就任し手腕を振るっている。

著者は、今日の「ものづくり」への警鐘に対して、「もの」や「ものづくり」の原点は何か。一番大切なことは何か。「もの」や「ものづくり」の主人公は誰か。彼らは何を求めているのか。主人公が向き合っている社会や生活は、今後、どうなるのだろうか。今、私たちは、どんな明日の社会と「人づくり」を目指すべきなのか。というテーマで、著者自身が体験してきた様々なことを基に、ものづくりについて述べている。

ものづくりの危機に対して根本は構造的な問題とし、日本の歴史から説明し、「もの観」の変化に改めて読者を気付かせ、人間の心に触れる。さらに、地球の未来を据えた4つの「あるべき理念」を示し、「ゼロ・エミッション」と「ゼロ・ウエイスト」を示唆している。

世は、フリータ、ニートが問題化してきているが、この原因には、若者の無気力化が大きく関わっていると言う。この問題は、現代社会構造の反映として生まれ、若者に「自ら学ぶ喜び」を大きく失わせてきたと述べる。そのた

めに、教育から学育の必要性を指摘する。

著者は、我が国のものづくり離れの原因として、ものづくりが身近になく、見る機会も感動する機会もないことなど、6つの原因を具体的に述べている。この6つの原因は、前述した若者が無気力化する社会的構造のメカニズムにも通じるものである。

しかしながら、ものづくりは、今後も進展し、これからのナノテクノロジーなどの先端工学技術、バイオテクノロジーや生命科学での驚くべき社会の変化の中で、大きな役割を担うとして、ものづくりの将来予測を示す。

このような次代の進展に対して、これからの工業生産構造は、アイデンティティーとカスタマイゼーションが大切な時代と示唆する。

また、豊かな少子高齢化社会への移行に触れ、現実を直視しつつ、求める社会へと持論を進める。

終章に近づくにつれて倫理観に重点を置き述べる。特に、戦争はなぜ絶えないのか。如何なる理由があろうとも戦争を繰り返してはならない。悲惨な時代を体験した著者は、倫理観をしっかりと据えて様々な観点から戦争を批判している。この倫理観は、例の建築構造計算偽造事件にも発展させて、安全への技術的責任について言及している。

さらに、著者は、若者の生と死を題材とした変わりゆく生命観と人生観という次元に論を進める。

終章では、ものづくりの学育として、ものづくりの原点に帰り、人づくりの学育が、今日のものづくりの警鐘に対しての基盤を考え、「ものづくり大学」の実学重視の学育を述べる。

(日刊工業新聞社, A 5判, 220頁, 1890円) (田中正一)